

令和6年度

あ く た み ま ち や い せ き

# 芥見町屋遺跡現地見学会

令和6年11月30日（土）13：30～

主催：岐阜県文化財保護センター



① 9地点全景（北東から）



③ 11地点全景（北から）



芥見町屋遺跡（国事業）位置図



発掘調査の様子



平安時代の竪穴建物（西から）

## ●芥見町屋遺跡（国事業）データ

所在地：岐阜県岐阜市祇園1丁目

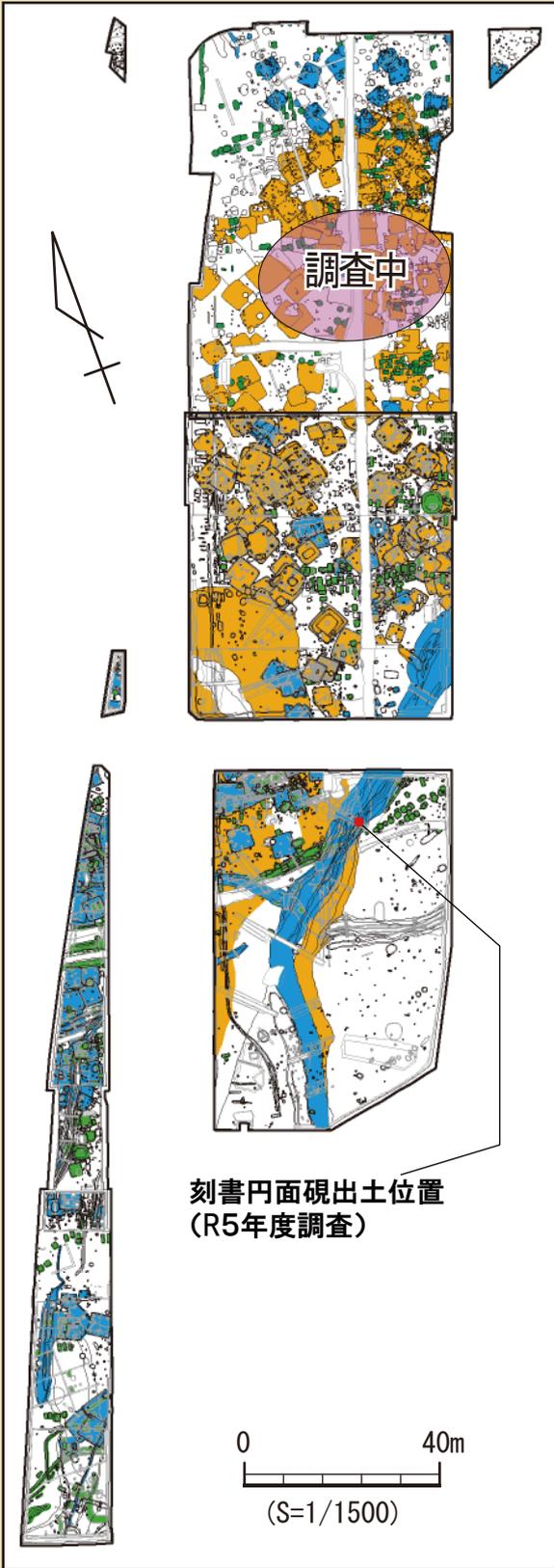
調査面積：4,728.4㎡

事業者：国土交通省中部地方整備局  
岐阜国道事務所

事業名：国道156号岐阜東BP建設事業

調査期間：令和6年4月～令和7年1月上旬

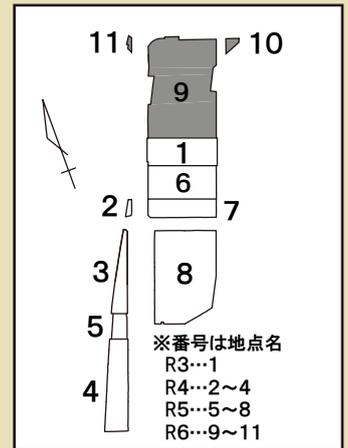




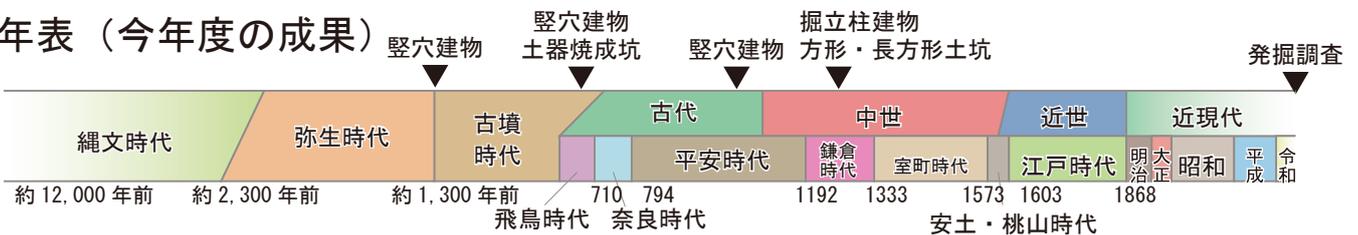
### ●発掘調査の概要

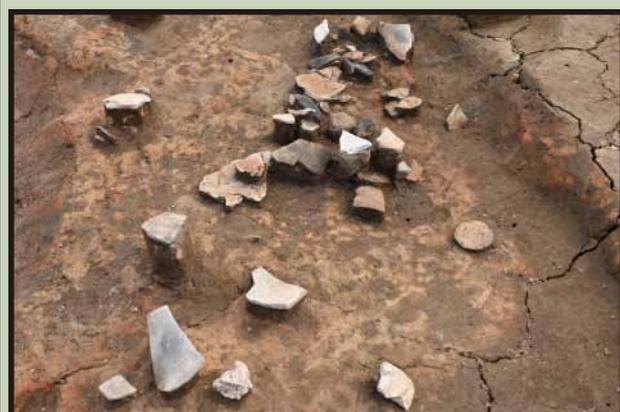
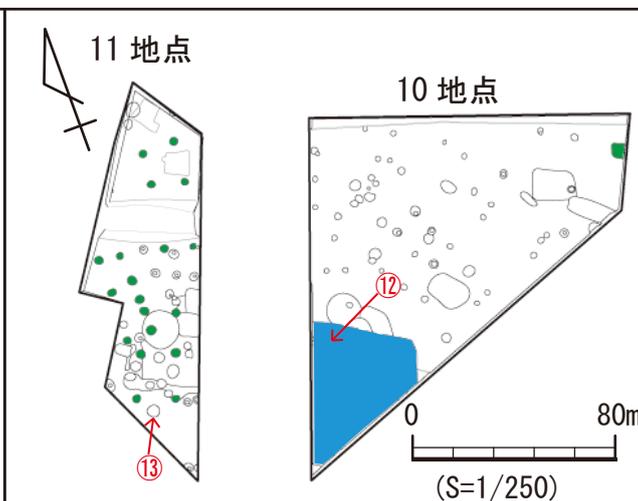
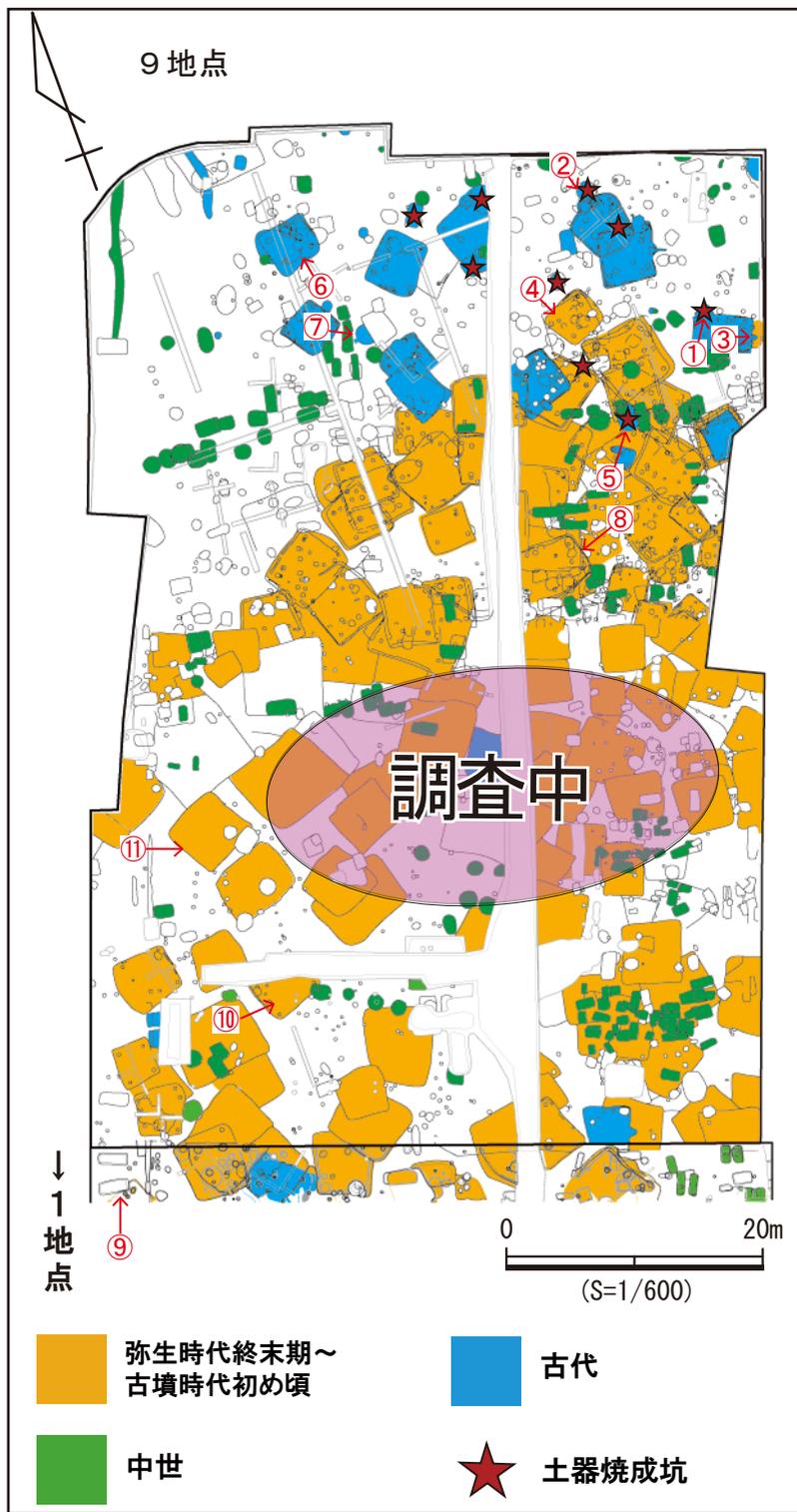
芥見町屋遺跡は、岐阜市東部、長良川左岸の自然堤防上に立地する遺跡です。当遺跡の調査は、昭和47年に岐阜県教育委員会が行った調査を嚆矢とします。当時の調査では、今年度の発掘区に近接した場所で、弥生時代後期から古墳時代初め頃<sup>たてあなたてものもと</sup>の竪穴建物跡5軒が確認されました。また、平成22年度の当センターの調査では、今回の発掘区から北西約700m離れた長良川堤防沿いで、鎌倉時代から近代にかけての建物跡、溝、井戸、土坑<sup>どこう</sup>などが見つかり、現代の地割が中世にまでさかのぼる可能性があることがわかりました。この他岐阜市による調査が随時行われています。

国道156号岐阜東BP建設事業に伴う調査は、今回で4年目です。令和3年度に着手した発掘調査によって、弥生時代後期から古墳時代初め頃と古代<sup>くじょうかいどう</sup>の建物跡、近世の郡上街道跡などを確認し、土器や陶器などの遺物が約40万点が出土しました(令和6年10月現在)。



### 年表 (今年度の成果)





②土器焼成坑から出土した土師器



③竪穴建物のカマド



①古代の土器焼成坑



④弥生時代～古墳時代の竪穴建物群



⑤土器焼成坑と物原



⑥古代の竪穴建物



⑦土坑から出土した須恵器と礫



⑧弥生時代～古墳時代の焼失家屋

### ● 9・10・11 地点の成果

【弥生時代～古墳時代】この時期の遺構・遺物は、主に弥生時代終末期から古墳時代初め頃に属します。主な遺構としては、<sup>たてあな</sup>竪穴建物があります。竪穴建物は、これまでの調査で 111 軒確認していましたが、今回の調査のみで 123 軒みつかった（10 月末現在）ことから、当該期の集落の中心部が確認できたと考えられます。これらの竪穴建物の平面形は方形のものが多く、一辺の規模は 4 m から 5 m 程度ですが、中には 6 m を超えるものも認められます。また、床面に長楕円形の川原石を据え付けた炉を備えるもの（写真⑩）や、屋根が焼け落ちた状態で埋没した建物（焼失家屋、写真⑧）もみられます。特に後者は、建物で使われていた建築部材が炭化した状態で残っており、当時の家屋の構造を考える上で貴重な資料です。今回の調査で当該期の集落が、地形が低くなる 9 地点北部から 8 地点の間の微高地上、南北約 120m、7,000 m<sup>2</sup>以上の範囲に立地していたことが分かりました。

【飛鳥時代～平安時代】この時期の遺構・遺物は、発掘区内に散在する傾向がありますが、8 世紀後半頃に 3・5 地点や 8 地点に集中します。後述する<sup>こくしょえんめんけん</sup>刻書円面硯はこの頃の遺物です。今回の調査では、飛鳥時代（7 世紀頃）と平安時代（10 世紀頃）の遺構・遺物がみつかりましたが、1 地点や 9 地点は地形が高く、後世の耕地化によって壊された建物も多くあったと考えられます。調査では、竪穴建物 12 軒の他、<sup>どきしょうせいこう</sup>土器焼成坑 9 基を確認しました。この時期の竪穴建物は、平面形が方形で、一片の規模は 4 m 程度です。東壁や北壁にカマドを備え、火を焚いた痕や構造材の川原石が残っていました（写真③・⑥）。土器焼成坑は地面を掘った穴の中で<sup>はじき</sup>土師器（※）の甕や鍋などを<sup>かめ なべ</sup>野焼きで焼成した遺構（写真①・②）で、9 地点の北東部に分布します。※古墳時代以降に作られた素焼きの土器の総称。

写真⑤の土器焼成坑では、作業場の周囲に、不良品を廃棄した状況（物原<sup>ものばら</sup>）を確認しました。また、時期は異なる可能性はありますが、1地点や3地点、5地点にも同様な遺構があり、県下において同種の遺構がまとまって検出された事例がないことから、その特殊性が注目されます。こうした遺構が当該地に営まれた背景には、土師器の生産と直結した長良川の水運があった可能性があります。

【鎌倉時代～室町時代】この時期の遺構としては、平面形が方形や円形をした土坑群があります。これまでの調査でも多く見つかっていますが、特定の場所に集中したり、軸方位が揃ったりすることから、この遺構が墓穴である可能性を考えています。この他11地点で、掘立柱建物<sup>ほったてばしらたてもの</sup>（写真⑬）3棟を確認しました。当該地では、中世以降遺構や遺物が少なくなることから、次第に現代に近い土地利用に変化したと考えられます。

【江戸時代】今年度も、郡上街道跡に関連する遺構である、道路側溝や路盤、垂円礫で埋め戻された補修の痕（写真⑨）などを確認しました。出土遺物から、当該地において、幕末頃に街道が再整備されたことが明確になりました。



⑩ 竖穴建物から出土した壺



⑪ 中央部に炉をもつ竖穴建物



⑫ 大量に出土した土師器と須恵器



⑨ 道路状遺構



⑬ 中世と考えられる掘立柱建物

## ●刻書円面硯について

「<sup>こくしょえんめんけん</sup>刻書円面硯」は令和5年度に8地点で出土しました。「円面硯」は、古代の硯の一種で、「<sup>すえき</sup>須恵器」(※)という当時の焼物です。芥見町屋遺跡の東方の丘陵地には古代の<sup>かかみぐん</sup>各務郡に属する一大窯業地であった<sup>みのすえこようあとぐん</sup>美濃須衛古窯跡群があり、刻書円面硯も8世紀頃に美濃須衛窯で生産されたと考えられます。刻書は、「<sup>うみ</sup>海」(墨汁を溜める部分)の外面に刻まれていました。破片は2つあり、それぞれ「千年百年」「大平大楽」など12文字程度が刻まれており、それぞれの前後関係は現時点で不明ですが、漢文で縁起の良い文章が刻まれていると考えられます。須恵器にこれほど多くの文字が刻まれた事例は、全国的に見ても少なく、非常に貴重な資料です。

※古墳時代中頃に朝鮮半島から伝わった青灰色の硬い焼き物。



復元イラスト



者カ  
千年  
百年



歳  
大平  
大楽  
有

## 宇野隆夫帝塚山大学客員教授のコメント

芥見町屋遺跡は長良川と山田川に囲まれた自然堤防上に立地する遺跡であり、地理的環境から水陸の交通の要所であったことが推察される。こうした地理的要因を背景に、弥生時代終末期から古墳時代初め頃にかけて多くの建物群が計画的に配置される集落が生まれた。今年度の調査では、その範囲がほぼ特定された点が特に評価できる。古墳時代の集落としては規模が大きく密集した建物配置であることから、古墳時代開始期の社会・軍事的緊張を背景として成立した集落であったであろう。

飛鳥時代から奈良時代にかけて、この地に再び集落が出現するが、珍しい須恵器類や土器焼成坑などが少なからずあり、一般集落とは考えられない。今回確認した集落の中には、<sup>ごう</sup>郷レベルの有力者が活躍したであろう物資集散拠点がある一方、長良川に近い県事業の発掘区では、<sup>かんが</sup>官衙(※)が存在したことをうかがわせる方形の大型柱穴跡などが見つかっている。この時期の集落は、当時の国家的な産業・物流の整備と関わって成立したものと推定しておきたい。平安時代、特に9世紀末以後には、地域の有力者が新規開拓して成立したとみられる集落が展開していき、それまでとは異なって人々の営みが近代にまで連綿と続いた。中世には、長良川沿いなどに集落が移動し、現代の景観に近い状況になったと考える。

長良川と、それに沿うように形成された平地という交通に絶好な場所をめぐり、様々な社会的・政治的・経済的背景による人の居住・物の生産と、両者の絶え間のない往来を発掘調査から時代を通して明らかにしたという点で、今回の調査においても多くの重要な発見があったと評価したい。

※古代の役所や官庁の総称。

令和6年11月30日 岐阜県文化財保護センター TEL:058-237-8550 FAX:058-237-8551

※本資料の内容は現時点の調査成果であり、今後変更される場合があります。

文化財保護センター  
ホームページ→

